

プレスリリース及び会議決議の報告  
**世界ウラン兵器会議**  
核戦争のトロイの木馬

2003年10月21日

ハンブルク、ドイツ

2003年10月16～19日、ドイツのハンブルクにおいて劣化ウラン/ウラン兵器が開催された。イラク、アフガニスタン、オーストラリア、日本、米国、カナダ、英国、スウェーデン、アイルランド、フランス、ドイツ、スイス、ベルギー、オランダ、オーストリア、デンマーク、イタリア、スペイン、アルジェリア、キューバなど、20の国々を代表する200名を超える参加者があった。科学者、医療専門家、核兵器研究所の内部告発者、アフガン国際戦争法廷の検事、退役軍人と遺族、市民、NGO、平和と反グローバリゼーションの活動家を含む35人が発言者となり、このような違法兵器の影響についての最新の知見と問題について報告した。イラクの科学者であるDr.サウド・アル・アッジは、この会議の直前の10月12日に、国際的に知られている「核のない未来賞」から1万ユーロの賞金を授与された。彼女は1991年の湾岸戦争によるイラク南部の大気、土壌、水の劣化ウラン汚染についての環境研究結果を報告した。

二日間の予備セッションのあと、二日間のワークショップが開かれ、科学、国際法/組織、被害を受けた退役軍人と市民といった、重要な問題が議論された。ワークショップはこの問題についての共通認識を得ること、また将来的な国際共同行動の計画に向けた戦略について議論するためのものであった。予備セッションは英語で、ドイツ語と日本語の同時通訳付きで行われた。

6つの独立の映像製作者が会議全体を記録し、4つの国から出された6つの写真展示が披露された。写真展示には、国際的にも著名な日本の写真家である森住卓氏によるイラクの最新の写真もあった。この問題に関連したビデオと映画が、ワークショップの間に公開された。

会議の様子はインターネットで中継放映されるはずだったが、インディメディアの予期せぬ問題が生じたため、会議の期間中に中継することはできなかった。サーバーの問題が解決し次第、会議の様子はインターネットに流されるが、その予定は会議のウェブサイト<http://www.uraniumweaponsconference.de>に掲載される。

10月17日金曜日に記者会見が行われたが、主要メディアからの参加は非常に少なく、未だにこの問題の重要性が理解されていないかのようである。会議についての記事は、革新派のわずかばかりのメディアで流されたただけにとどまった。会議のコーディネーターであるマリオン・キューバは「この会議は、米国、英国、NATO 軍が、イラク・ボスニア・モンテネグロ・セルビア・コソボ・アフガニスタンで使用した劣化ウラン兵器の壊滅的な健康問題への継続した取り組みの一環であると確信している。今日でも7千人のドイツ軍兵士が、コソボやアフガニスタンの汚染地域で軍務に付いている。」と語った。

**会議参加者は圧倒的多数で以下のことに合意した：**

- ・劣化ウラン/ウラン兵器は、現在も過去においてもずっと、現存の法律(国際法及び米国軍事法規)や条約に違反している。
- ・将来的なキャンペーンや条約においては、劣化ウラン/ウラン兵器の「禁止」は「廃絶」に置き換えるべきである。
- ・2004年に開催される独自のイラク国際戦争犯罪法廷を支持する。
- ・イラクの専門家によって報告された、南イラクにおける劣化ウランによる環境汚染と疫学的証拠は、劣化ウランと放射線関連疾患の増加が直接につながっていることを明らかにした。
- ・会議は、劣化ウランのような放射性微粒子の内部被曝の国際放射線防護委員会(ICRP)によるモデルを拒絶し、欧

州放射線リスク委員会(ECRR)の低線量被曝についての 2003 年モデルを劣化ウランによる健康リスクの分析に用いるように勧告する。

・政府や核政策推進勢力を支えている機関による情報操作や財政的圧力から独立した、信頼できる研究結果を出すことのできる、独立した研究・教育機関「自由大学(FreeUniversitu)」の設立は緊急の課題である。

・世界中にある戦場、試射場、製造工場、軍事基地などの汚染地域の全面的な調査を行うために、国連環境計画(UNEP)と世界保健機構(WHO)が、核政策推進勢力の一翼を担っている国際原子力機関(IAEA)からは独立した立場を取るように、強く働きかけるなければならない。

・被害を受けた軍人、民間人に対して、即刻、医療が施されるべきである。

会議の全決議と結論は、近日中に下記のアドレスに掲載される：

<http://www.uraniumweaponsconference.de>

### 会議の声明—ICRPリスクモデル

1)我々は、劣化ウランのような微粒子の内部被曝に適用される国際放射線防護委員会(ICRP)のリスクモデルを拒絶する。そのような被曝は局所の組織において高密度の電離を引き起こすが、それを従来の外部被曝モデルで平均化してしまえば、正しいモデル化とはいえないからである。このモデルが根拠としている知見は間違っており、時代遅れである。それは、熱せられた石炭を口にしているのに、それをまるで炎の前にただ座っているのと比べるようなものである。

それに加え、粒子の存在する組織が局所的に受ける多数の放射線は、形質転換(悪性化)の危険性をより高める。細胞は初回の放射線打撃(ヒット)に反応しているのに、またもや打撃を受け続けるからである。5ミクロン以下のウラン粒子は、1日あたり2回の放射線打撃(ヒット)をもたらす。

2)我々は、劣化ウランの微粒子はリンパ系によって全身のどこへでも運ばれ得るとを確信している。そのためにリンパ腫や白血病が目立った影響として出ているのかもしれないが、最終的にはあらゆる種類の癌が出てくる可能性がある。

3)微粒子は胎盤にも入り込み、放射線によって胎児が影響を受ける。

4)欧州放射線リスク委員会が2003年に出した内部被曝リスクについての国内的なモデルを、劣化ウランによる健康リスクの分析にも適用することが急務である。他の独立のどのようなグループも、この重要な問題についての見解を表明するように強く求める。

### 会議の声明—自由大学

我々は、工業の急速な拡大と環境への毒物・放射性物質の放出に伴う、最近の深刻な健康・環境・経済問題についての見解を出せる、独立した研究・教育機関としての「自由大学」の創設が急務であると確信している。

そのような大学は、多国籍企業や各国政府、軍部からの出資による研究への制約から独立しているという意味で「自由」なものである。

そのような機関の最初のプロジェクトのひとつは、低線量の人工放射線と健康の関係、特に劣化ウランの影響についてである。

会議に参加した科学者は劣化ウランと健康の問題に関する研究やアイデアについての情報を提供するネットワークをつくり、ウラン兵器ハンブルク委員会という組織を創設することを合意した。

## 世界劣化ウラン/ウラン兵器会議の決議—2

ハンブルク、ドイツ  
最終案—2003年10月25日

## 科学者のコミュニケ

ウラン兵器の使用の結果に関して、以下の事実には疑いの余地がないことを、本会議は確認する。

ウラン兵器は衝撃によって、セラミックなどの酸化粒子に変る。その径の平均は 0.001 ミクロンから 1.0 ミクロンの範囲にある(平均 0.01 ミクロン)。

このような物質は極めてまれなものであり、その性質と影響は、採掘や加工の行程で出るウランの粉じんについての研究と科学的に関連づけることはできない。

酸化ウランは何百マイルも飛散する。

劣化ウランの粉じんは標的の近くに留まることなく、地球物理学的なメカニズムで広範囲に拡散する。戦争から 10 年も経ったイラクの砂漠でも劣化ウランの粉じんが確認されている(パスビー、イラクのデータ)。劣化ウラン弾使用の 13 か月後に、コソボのジャコブ(?)の街路で粉じんが認められた(パスビー、日本テレビ、BBC)。使用から 13 か月後に国連環境計画(UNEP)がコソボから持ち帰った全サンプルの 46% に劣化ウランを認めた。同様に UNEP はボスニアとモンテネグロでも劣化ウランを検出している。

乾燥した気候のもとでは、セラミック状の酸化ウラン粒子が再浮遊し拡散してゆくのである。このことは、コソボにおける U238 と Pa238m / Th234 の同位元素の比率の測定にも示されている(パスビー、ストラスブルク、2001)。UNEP は、コソボの非濾過水で、ボスニアとモンテネグロでは直接的に空気中で、セラミック状の酸化ウランを検出している。このように、紛争からかなりの時間が経っても、粒子を呼吸とともに吸い込むことが起こりうるのである。劣化ウラン弾が以前に使用された地域では、汚染から数年経っても、ごく普通の地域に住むだれもが危険に曝されることになる。このことは 2001 年にブリストが行ったコソボでの尿検査で、調査対象となった 20 人全員が汚染していたことから、また湾岸戦争退役軍人の被曝 10 年後の尿検査(ドラコビク、シャルマ)でも示されている。

リスク評価担当の行政機関や軍部が用いている国際放射線防護委員会(ICRP)モデルでは、劣化ウランによる被曝線量はあまりにも低いので目に見える健康影響は現れないだろうと予測しているが、このモデルは内部被曝の評価には適切ではない。体内に取り込まれた放射性粒子は局所組織において高線量の被曝をもたらすからである。それにもかかわらず、ICRP モデルは外部被曝と平均線量に置き換えて、概算しているのである。

酸化ウランによる被曝の健康への危険性を示す証拠は山ほどある。そのひとつがイラクの癌登録のデータであり、癌・白血病・リンパ腫が 1991 年の湾岸戦争以降に急増している。イラクの癌登録データによれば、1999 年に、5 ~ 9 歳の子供達、つまり 1991 年の戦争当時に生まれた子供達の集団で、白血病のピークが見られている。通常は、子供の白血病というのは 0 ~ 4 歳の年齢層にピークが見られるものである。また、この会議でも報告されたイラクや湾岸戦争退役軍人の子供達の先天障害の増加もまた証拠のひとつである。

- \* 湾岸戦争症候群の中で遺伝子への影響(訳注:この場合は体細胞の遺伝子のこと。いわゆる次世代への遺伝的影響のことではない。)に関連するもので、癌・リンパ腫・白血病が含まれる
- \* コソボとボスニアに派遣されたイタリアの平和維持軍についての 2001 年 5 月の調査では、バルカンに駐在していた兵員の間では普通の兵員に比べてリンパ腫が 3 倍と著しい増加を示しており、その過剰相対リスクは 7.5 倍である。
- \* 英国議会と英国医学研究評議会が報告しているように、湾岸戦争に参加した英国の退役軍人ではリンパ腫が 2 倍と、統計的に有意な増加を示している。
- \* 1995 年から 2001 年にかけてのサラエボの癌登録では、リンパ腫と白血病が 10 倍以上に増加している。
- \* スペインとポルトガルでは、ボスニアとコソボで任務に就いていた兵士のリンパ腫や白血病が著しく増加している(今回の会議で報告されたスペインのデータ、ポルトガルのデータはエディ・ゴンザレスのもの)。

最後に、劣化ウラン粒子の生物学的影響に関する科学的根拠——健康影響にも関連するもの——としては、以下のような理論的・細胞学的(細胞生物学的)証拠があげられる。

- \* 1ミクロンの粒子が30ミクロン大の組織に対して与える線量は、年間およそ約 500～1000mSv(ミリシーベルト)になる(バスビーと矢ヶ崎の計算では、吸入された5mgの劣化ウランは、径1ミクロンの粒子  $10^9$ 個に、また0.1ミクロンの粒子なら  $10^{11}$ 個に相当し、成人であれば、リンパ系の細胞のひとつずつに1個ずつの粒子を十分あてがうことができるほどである。)
- \* イギリスの湾岸戦争帰還兵士の染色体検査では、二動原体および環状染色体といった抹消血リンパ球での染色体異常が5～10倍と増加している。他の研究を基に推定すると、この染色体異常の頻度は100～500mSvの外部被曝線量に相当する。それはまたフィルムバッジに記録された外部被曝線量が500mSvあったチェルノブイリの消防士達と同様の染色体異常である。これは多くの国で採用されている法的に定められた被曝限度の500倍にあたる。
- \* 最近の研究では  $UO_2^{++}$ イオンがDNAに強く結合することが知られている。これは長年、知られている染色技術の基礎にもなっている事実である。
- \* 最近の理論的考察によれば、ウランのような原子番号の大きい原子は、外部からの自然放射線のエネルギーを集中することによって高電離密度もたらし、局所組織に光電子による傷害を与えるとされている。年間1mSvの外部被曝線量でも、1ミクロンのウラン粒子の周辺では局所的な散乱により1000mSvの吸収線量となる。

——会議に参加した科学者一同

### 世界劣化ウラン/ウラン兵器会議の決議—3

ハンブルク、ドイツ

2003年10月19日採択

汚染地域の包括的な調査の必要性

イラクとアフガニスタンで、全ての環境要素(水、空気、土)及び人々の健康の側面も含めて、包括的な劣化ウラン汚染調査を行うことが緊急の課題であることを我々は強調する。UNEP や WHO は、劣化ウラン汚染に関するこのような評価を行う責任がある。これらの、あるいはその他の必要な調査を、彼らが意義ある期間内に行うことが期待されてお

り、またその責任がある。そしてこれらの調査結果を政府や IAEA などの機関によって変えられることなく公表し、一般の人々が入手できるようにするべきである。

汚染地域の人々の全面的な医学的調査を含む疫学調査も開始されるべきである。調査には尿中の劣化ウラン分析に関する調査、組織生検、染色体や細胞遺伝学的研究が含まれるが、それだけに留まらない。以前に被害を受けた人々、現在も被害を受けている人々への医薬品や医療支援などの治療が強く求められている。